コラム　先行学習１

＊鏑木良夫著「読解力を高め自信をつける先行学習」(2023 年ひつじ書房）より

―先行学習の過程―

過程０：事前に全文視写させる(P142～)

授業が始まるまでに、家庭学習として教科書の結論部分を全文視写させることが望ましい。国語の場合は全文視写させたりする。

視写は学習するための基礎体力を養う。具体的には、一点一画、一字一字を認識する、語の異同を意識する、語の選択について考え始める、筆者と論争するに至る等の効果をもっている。

全文視写を家庭でできない場合は、休み時間を使わせるとか、単元の第１次で全文視写の時間を取る。

全文視写のテキストには、文章などの「連続型テキスト」だけではなく、図・グラフ・表などの「非連続型テキスト」も含んでいる。

過程１：内容を見つける（P145～）

教える内容とは、本時の知識目標そのものを指す。したがって、教科書の記述から「 まとめ」を探せば、それが教える内容となる。

ところで、 教科書は発見学習の立場で編集されている。つまり、帰納的な展開を基本としているので、「まとめ」は単元が記されているページの最後に記載されている場合が多い。また発見学習を強調するあまり、結論を明確に記していない教科、教材、単元もある。このような場合は、①先行学習で授業をしない、②教科書から結論を読み解いて文章化した後に先行学習で展開する、のどちらかで授業するしかない。

例えば、４年国語の『ごんぎつね』の授業で、「兵十は、火なわじゅうをばたりと取り落としました。青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました」という文の中の「ばたり」という言葉から、兵十のごんに対する「も、申し訳ない。 取り返しのつかないことをしてしまった。ああ」と言った気持ちが読み取れるを教える内容と決め、それを目標としておけばよい。

過程２： 答えを与える予習（P148～）

〈先行学習における予習〉

① 学習範囲を数回繰り返して読む。ここでの「読む」は音読を基本とする。

② 予習内容を全文視写する。

③ 理解度を求める。学年によって段階は 2～5 段階などとしている。

過程３：予習内容の確認(P147～)

予習内容と同じ文言を教師は板書し、子供は教師の板書と同時にノートに書くことから授業は始まる。

教師の板書スピードに合わせることなく、先に書いてしまう子供が現れる。書いている言葉の意味を考えずに単に鉛筆を動かしている場合が多い。例えば、重要用語等は色チョークで板書するのだ。この時、子供には赤鉛筆を持ち替えさせてノートに書かせる。これで先走って書こうとする子供も、筆速が教師の書くスピードと同じになる。教師の板書のスピードを、ノートに書き写しながら思考できるスピード、 例えば１分間に２０から２４文字程度のスピードとしたい。

このように共書きを採用すると、どこで赤鉛筆を使うか、聞き分けるために集中力が高まり、ますます教室がシーンとなって、筆記用具を動かしている音だけが教室内に響く。知的緊張感が一気に高まる場面だ。なお、予習の内容が長い場合には箇条書き等を取り入れて板書すると良い。

過程４：1 回目の理解度評定（P155～）

〈理解度評定の例〉

５　説明できる…分からない友達の理解度に合わせて言葉を選びながら、分かりやすく伝えることができる。

４　かなり分かる…言葉と言葉の関係がわかる、言葉から関係する言葉を思い出すことができる。

３　まあ分かる…分からない言葉が使われていない。

２　少し分かる…分かる言葉が一つ以上ある。

１　全然わからない…使われている言葉は知らない言葉ばかりである。

コラム　先行学習２

理解度評価は、小学校を中学年以上で実践可能だが、小学校低学年は３段階、２段階が適切と考える。

過程５：教師からの補説（P157～）

予習内容を丁寧に説明する場面である。先行学習課程最大の「教材理解力の発揮」の場だ。

①言語感覚が鋭くなる言葉があればその意味を伝える。
②上学年で学ぶ内容との関係を伝える。
③教科書では触れていない内容だが、それを知っていれば理解が確かになることを教示する。
④その教材の背後にある考え方も教示する。
⑤使われている文や図・表・グラフ等について読み解く視点で解説する。

＊補説を進めるにあたって、非常に有効な方法が比喩だ。平たく言えば例え話だ。予習内容を日常生活の何かに例えるクセを身に付けよう。

過程６：理解確認（P159～）

同じ文脈内における知識適用場面である。例えば、算数なら数値を変えただけの問題に取り組ませることもあり、理科ならば実験で確認することであり、国語なら例示された文言以外のどこに主人公の考えが書かれているかを探すことであり、社会ならどこに記載されているかを教科書等から探し、視写することである。

これらの活動の中に、説明し合う、友達に教える、書きぶりを比較し合う等の活動が加わると、なお良い。

もちろん、わからない顔をしている子供には、どんどん教師が教えてしまっても構わない。そのような方法で低・中学力の子供も授業に参加させる。

過程７：活用課題（P162～）

先行学習も活用課題まで進むと思考の自由度等が広がり教室内は盛り上がる。

思考課題は一人では解けない問題を与えたい。席を立ってどう解くかを相談する子供、一人で黙々と答えを書いている子供、分からないよとつぶやきながら相談する子供、教師に聞きに行こうとする子供、そして真っ先に教師に聞きに来て納得顔の子供、いろいろな学びの様相が見られ、コミュニケーション能力も高まる場面である。

ここは、わからなくても安心していられる場面、教師に答えを教えてもらうという選択肢を設けるからだ。違いを認め合う構えを醸成できる場面でもある。だから、ここはいじめ予防にもつながる場面と言っても過言ではない。そして、座席にしがみつくことから解放させ自由闊達な雰囲気を味わうことのできる場面だ。もちろん授業のクライマックスだ。

なお、この自己判断・自己決定を迫ることができる場面であり、極めて教育的な価値のある場となる。

―活用課題作成の観点－（P166～）

○逆・反対から考えさせる：式を教える→ 答えを与えて式を考えさせる。
○不十分な条件を与える：文章を書かせる→ 不十分な問題を与えて、解けない原因を考えさせる。
○極大極小で考えさせる：長さ１ｍの棒を使って、テコの原理を教える→ 棒の長さを５ｍにしても成り立つかを考えさせる。
○適用範囲の拡張を図らせる：２桁×２桁のかけ算を教える→３桁×３桁は計算できるか。または小数でも成り立つか。
○誤答を与える：は・か・せの方法で解き方を教える→ 誤答を提示し訂正させる。
○操作させる：図形の作図方法を教える→作図させる、友達のやり方にコメントさせる。
○言語を追加させる：主人公の気持ちを教える→主人公の気持ちを詳しくするために、気持ちが記されている分に言葉を付け加えよう。
○作問させる：答えは○○だ→答えが○○になるような別な問題を作らせる。
○説明・解説させる：鎌倉幕府の成立→幕府成立が示す歴史事実をできるだけ多く言わせる。
○取扱説明書を書かせる：ものを操作させる→取扱説明書を書かせる。
○過情報を見抜かせる：答えは○○だ→過情報になっている問題を解かせる。
○資料選択させる：この資料を見ると○○が分かる→余計な資料はどれでしょうか。